# 愛は憎しみを越えて

高橋信次

人間不信と欲望の渦巻く現代で
生き抜く道は力か、金か
それとも憎悪に燃える心だろうか
愛は、すべてを癒やす力となり得るか

# 愛は憎しみを越えて

高橋信次

三宝出版

愛は憎しみを越えて
昭和56年2月15日　新装改訂版第1刷発行

検印廃止
著　者　高橋信次
発行所　三宝出版株式会社
〒111 東京都台東区寿3丁目19—2—201
電話03(843)4956(代)振替東京2-168990
© 1981
0093—0201—2833　　印刷製本所　旭印刷工業株式会社

●目次

倒れた守銭奴……5
生と死の谷間……8
暗いドームの中で……10
天使の声……19
転生のあかし……29
愛は国境を越えて……39
台湾から日本へ……48

差別への抵抗……64
父の苦悩……86
厳しい偏見……107
柱なき母子……120
夢思う故郷……133
地獄で仏……148
悲しき流転……176
夢よはるかに……194



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

守銭奴への道……222
心ない欲望のとりこ……238
報復……262
心と行ないの中に……289
目覚め……307
復活……315
あとがき……323

# 倒れた守銭奴

朝の陽射しが庭一面に広がり、あたりの樹木に柔かい光が反射し、陽炎が立っていた。玄関の両袖を彩る沈丁花が、春の足音を忍ばせるように、小さな花を幾つも咲かせている。玄関から門へ、夜露に濡れた敷石が光り、その両側に手入れの届いた各種の草木が、大きな庭石と調和を保って植えられている。庭との区分は、真竹の小枝をしゅろ縄で束ねた垣根が真新しく、いかにもこの家の裕福さを物語っている。

門柱は、見上げるような、白の御影石である。向って右に、分厚い檜(ひのき)の板に墨で書かれた三田村商事株式会社の文字が見え、左はこの家の主人、三田村清の表札がかかっている。

三田村清の家は、都心から少し離れた池上線の長原駅から南に歩いて十分、上池上の屋敷町の中にあった。敷地六百坪、建坪八十五坪、家も庭も贅を尽くした構えである。

清は、この屋敷の中で金融と不動産の二板看板を持って、正式な金融機関から借入れのできない商店、小工場主を相手に商売をしていた。

四季の緑に囲まれた豪壮な屋敷も、十日に一割という暴利が支えていたのであった。このよう

な土地も建物も、商売上の信用を得るために必要な道具でしかなかった。そして、住む家を取られた者、あるいは自殺に追い込まれた人びとにとっては、悪魔の洞窟のような屋敷だっただろう。

家族は、内妻の田村恵子との二人だけである。山口という青年が事務員として通ってくる以外は、使用人もいなかった。恵子は秘書役兼事務員として勤め、忠実に働いてくれている。

清の父は、群馬県伊勢崎の出身で、母は台湾に住んでいた中国人である。恵子の入籍がまだなされていない理由は、こうした事実を恵子に知られるのを恐れたためでもあった。

彼は、恵子を嫌いではなかった。むしろ、いつでも正妻に迎えたかった。しかし母親が台湾人であることが恵子に知れたら、彼女は自分の許を去って行くにちがいないと思い、それが清にはこわかったのである。

そんな一面のある一方、清は金にはきたなかった。一日の必要経費だけしか恵子に渡さなかった。買物も、領収書を持ってこさせ、余った金は全部取り上げてしまう。勿論、恵子への小遣いなど一銭もやらない。

清の片腕である事務員の山口伸は、戦時中、爆弾の破片で片腕を失っている男である。そのため勤め先が見つからず、戦後しばらく闇屋で糊口をつなぎ、同じ仲間の清と知り合って、貸付対象者の財産状態調査員として働くようになったのである。貧しい山口には、妻と二人の子どもがいた。給料が安い上に日給制なので、日々の手当では足りず、清から金を借り、その利息分は毎

晩遅くまで残業することで返済に当てていた。

三田村商事には出張所があった。場所は伊勢崎市である。清は、その町で小、中学校を終えている。本店の上池上は三人だが、伊勢崎には出張所長の山本恒男、事務の荒木充がいた。二人はいわばやくざ者で、不良貸付で返済できない債務者がいると脅迫し、強引に担保を取り、損害金を巻き上げる冷血漢たちである。二人は清の指示に従って、何処へでも取り立てに行き、その歩合によって生活していた。

清はこうした環境の中で、朝早くから夜遅くまで金を追いかけていた。生活も不規則であり顔色も悪く、体力はもう限界に達していた。

この朝も六時に起き、貸付台帳に目を通すと、担保物件の土地の処分に思いを巡らせた。清は七時半に出勤して来た山口と、債務者調査のことで打ち合わせをした。打ち合わせの途中、彼はトイレに立った。廊下伝いに歩いたとき、急にめまいがした。廊下の柱に体を預け気分を落ちつかせたが、そのまま崩れるように倒れた。その時清は二十八歳だった。

恵子は廊下の物音に気づき、すぐにその場に駆けつけた。倒れている清を抱き起こそうとしたが、男の体は意外に重かった。彼女は大声で、

「社長、社長。清さん、清さん」と呼び、

「山口さん。来てちょうだい。社長が、社長が大変……」

もう気は動転していた。

山口は、恵子のただならぬ叫びに、玄関と壁一つ隔てた事務室から、血相を変えて飛んで来た。彼は清の頭に手を当てると、心臓に耳を当てた。彼もどうしていいかわからなかった。恵子は、しばらく立ちすくんでいたが、気がついて事務室に駆け戻ると、一一九番に電話した。

救急車のサイレンが、朝の屋敷町の静寂を破った。清を乗せた救急車は、第二京浜国道を抜け、池上の救急病院で停まった。

彼は、四階の個室に運ばれ宿直の医師の診察を受けたが、身嗜(みだしな)みを整える間もなかった恵子は緊張で青ざめ、人事不省に陥っている清の容態を部屋の隅に立ったままじっとみつめていた。

## 生と死の谷間

病院の窓を通して柔らかい春の陽射しが、ベッドに横たわっている意識不明のままの清を、暖かく包んでいる。

そして片腕には点滴の針が、しっかりとばんそうこうで固定され、リンゲルの容器が吊(つる)されて静かに減ってゆく様子は、清の病状を教えているかのようだ。枕元には、恵子が生けた白百合の



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

細長い花びらが、清の病状を心配しているかのように首をかしげている。
守銭奴に徹していたがめつい清、無慈悲な清も病気には勝てなかったようだ。今はまったく意識不明である。そして「死にたくない、死にたくない」と、うわごとをいって何かにおびえているようだ。医者は脈はくを数えながら、懐中時計の秒針を追っている。そばにいる人びとの心の中は騒いでいても、あたりは秒を刻む時計の音だけが耳に響いてくる。そばには事務員の田村恵子と山口伸が、心配そうに息を殺して医者の一挙手一投足を見守っていた。
静かな緊張した空白の時間が流れていく。
看護婦の相川しずえは、
「先生。絶対安静ですね」
と、患者の血の気を失った真っ青な顔色と、色あせた唇を見て医者にいった。
「そうだな。外部から与えられている刺激にも、まったく反応がないからね。もうちょっと容態を見なくては、何ともいえないな」
と、ひとりごとのようにいっている。
恵子は清の枕元にまわり、
「社長、社長」
と、呼んだ。やはり顔の表情は変らない。返答もなかった。

恵子の顔には驚きと悲しみの涙が一すじ、二すじ、ほおを伝わった。恵子は、それをぬぐおうともしないで清の顔をのぞいていた。今までの憎しみを越えた愛する人へのそれであった。

「これで駄目になってしまうのかしら。私はどうしよう。人生とは、こんなにあっけなく終ってしまうものなのかしら。私にはどうすることもできない。神様、清さんを助けて下さい。お救い下さい」

恵子は目を閉じて祈る以外に道はなかった。

山口も、あまりの驚きに何をどうすればよいかわからぬまま血色を失い、見守っているほかなかった。他のことを考える余裕もなく——。

## 暗いドームの中で

その頃、清は暗いドームの中で、早鐘を打つのに似たガンガンという振動音を聞きながら、うずくまって頭をかかえていた。

どうなってしまうのだろうか。このまま、死んでしまうのだろうか。こわくて、頭に当てている手を放せなかった。

そのまま暗いドームの中を、エレベーターのようなもので、どんどん下に下がって行くようだ。地下鉄の中で電車に乗っている時と同じような、ごうっという連続音に変っていった。

(これは死んでしまうんだな。しまった。まだ死にたくはない——まだ死にたくはない)

と彼は思った。

やがて、ごうっという音は止まり、清は体をひざにつけ、頭をかかえたまま、じいっと様子をうかがっていた。誰もいない真暗な世界。

(静かだ。僕はどうしてこんなところに来たんだろうか)

清は、勇気を振るって頭をかかえていた手を放し、ひざから頭を上げて前を見た。真暗だ。左右にゆっくり顔をまわして見た。一寸先も見えない。しかし先ほどと違って、気分はすっかり良くなっていた。つい先ほどまでは、あれだけ気持が悪かったのに。

どんな事になってしまったのだろうか。清は、心のなかを冷静にしようと努めた。

急に今までの事務所のことを思い出した。

(そうだ。恵子はどこにいるのだろうか。山口は——)

と、自分の身近な者たちのことを思い出すのだった。そうすると、清の目の前に霧のようなものが白く湧き出してきた。そしてぼんやりした霧のようなとばりの中に、四、五人の男女が何かのまわりを取りかこんで心配そうに立っている。

白い壁の部屋――。だんだんと白い霧が晴れて、はっきりと見えてきた。
（誰かベッドに寝ている。ああ、恵子が泣いている。山口もいる）
そしてベッドの足の方に立っている見知らぬ男女が白衣を着けて、ベッドに横になっている者の手を持って何かしていた。
（なぜ、恵子や山口があんな所に来ているのだろうか。夢を見ているのだろうか）
清は不安だった。
清はこのようなことも、考える余裕が出てきた。相変らず暗いドームのような、洞窟のようなわけのわからない場所である。清には恵子と山口が、なぜあんな部屋にいるのかわからない。
（何とかそばに行ってみたい）
と思った。
しかし距離は離れている。ドームの中から出られない。
今度はだんだんと近くに見えてきた。よく見ると、白衣を着ているのは医者と看護婦であった。
（ここは病院か――。寝ているのは誰だろう）
目をこらしているうちに、
（ああ、僕だ――）

と清は気づいた。

（僕はここにいるのに。なぜベッドに寝ているのだろう）

ベッドの上の清は昏々と眠っている。

いつも鏡に映る自分の顔とまったく違って、真っ青だ。唇も色を失っている。寝ている自分は死んだように動かない。しかし、もう一人の自分は別にどこも悪くはない。ただ暗いドームの中にいるだけだ。清は大声をあげた。

「恵子！　恵子！　助けてくれ――」

恵子は涙を流しながら、ベッドの清を見て何かしゃべっている。清はそれを見ているが通じない。不思議なことがあるものだ。

清は心を落ちつけて考えてみるのだった。

その時、病室の中では、清が無意識のまま腹の底から「恵子！　恵子！　助けてくれ――」と、うわごとをいい出した。

恵子は清の顔をみつめながら、

「社長！　社長！　しっかり、しっかりして下さい！」

と、声を出して泣いていた。

山口も、清の足元でベッドに手をついたまま、

「社長！　社長！　死んではいけません。がんばって下さい。神様どうぞ社長を救って下さい」と、目に涙をいっぱいためて祈っていた。

この時、恵子や山口の胸の中にあるものは、今までの厳しい無慈悲な、がめつい清の姿ではなく自分たちの親しみのある上司としての尊敬の心だけしかなかった。

医者と看護婦は、冷静に清の容態を見守っているだけだった。

重苦しい空気が病室の中に満ちてきた。白百合の花だけが表情をくずさないで、美しく開いた細長い花弁で清の枕辺を飾っていた。人の力ではもはやなすすべもない清の容態であった。

それは「神」以外には知る由もないのだ。一度無常の風が吹き荒れれば、どんなに貯えた財産も、地位や名誉も欲望も、すべてのものから見放され、生まれた時の裸のままで元の世界に帰らなくてはならないのだ。人はこのような瞬間的な人生を、足ることを忘れ、無意味な苦しみをつくり、一生を終えて行く。誠に哀れという外はない。

生と死の境をさまよっている病床の清の姿を見た時、人はみな物質欲望のむなしさを知るだろう。

肉体から抜け出した、ドームの中のもう一人の清は、

「もう駄目なのかも知れない。僕は今までお金の奴隷だった。恵子にも山口にも僕は何をしてやっただろうか。そして多くの人びとを泣かせ、苦しませてきた僕だ。僕はこの人びとの幸福を奪



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb